

**月例会ダイジェスト 【69】**

「プレゼンティーイズム」は「アブセンティーイズム(欠勤)」と対比し、出勤していても体調が優れずパフォーマンスが上がらない状態と説明されることが多い。ただ、その概念や定義は諸外国で異なり、歴史的にも変遷してきている。今回のさんぽ会は「プレゼンティーイズム」をテーマに、講師に獨協医科大学名誉教授で栃木産業保健総合支援センター所長の武藤孝司氏を招き、WEB開催された。コーディネーターは、福田洋氏(順天堂大学大学院)、白田千佳子氏((株)エクサ)、安倉沙織氏(アビームコンサルティング(株))の3名。

武藤氏は初めに、世界でのプレゼンティーイズムの研究は2000年頃から本格的に始まり、日本では2006年に日本産業衛生学会の雑誌に荒木田美香子氏らの論文が発表されたのを機に広まったと述べた。この論文で「出勤している労働者の健康問題による労働遂行能力の低下であり、主観的に測定が可能なもの」と定義された。2000年以前は、例えば、英国では解雇を避けるため上司の心証を良くしようと居残り勤務することを指したという。同年以降は、欧州では体調不良や病気を持ちながら出勤している状態、米国では出勤している労働者の健康問題に関連した労働生産性損失として各々研究されていると説明。家族や借金の問題等で仕事に集中できず労働生産性が下がることもプレゼンティーイズムとする考え方もあるが、この日は、論文に多い健康に関する定義に沿って話をした。

プレゼンティーイズムへの職場の対策としては、病気をもちながら勤務する人が安心して働くために「治療と仕事の両立支援」が重要と指摘。がんの罹患率の増加や罹患後も働きたい人が大半といったデータも示した上で、「特に産業医のいない小規模事業所を中心に両立支援対策が不十分な点は大きな課題」と強調した。また、プレゼンティーイズムの状態から労働生産性を上げることは「健康経営」につながるとし、「従来のトータルヘルスプロモーションプランによる従業員の健康保持・増進の普及は芳しくないが、健康経営への企業の関心は大きい。健康は費用ではなく、人的資本に対する投資と考えるのが理念で、生産性向上により企業の業績が上がり、社会への効果も高まる」と述べた。

次に、プレゼンティーイズムに関する具体的内容に言及。病気の時に出勤するのはなぜかについては欧州で研究が進んでいるという。個人的要因では、同僚に負担をかけたくない、休むと収入が減る、仕事が楽しいなど、職場の要因では、従業員の不足、休みにくい休業制度などを例示した。病気で

も出勤する影響では、心身への悪影響のほか、生き甲斐だというポジティブな面もあった。職場への影響は、作業能力や労働生産性の低下、長期休業の増加、感染症の蔓延などを列挙。安心して休める対策には、病気休暇制度、雇用形態の安定、代替要員の確保などを挙げた。安心して働ける対策はやはり治療と仕事の両立支援だとした。ただ、「両立支援の実証的研究はあまりなく、今後のテーマ」と語った。さらに、健康問題によって会社の費用はどうなるかという米国の研究で「医療や薬、欠勤、休業に比べ、プレゼンティーイズムによる損失は非常に大きいと2003年に報告された」と紹介した。

労働生産性低下をどう測定するか、測定指標の開発が進んでいる。健康問題一般に対応した指標のほか、疾患に特異的な指標もできている。日本で翻訳または開発されたものが複数あり、アレルギー性鼻炎のような疾患特異的なものもある。WHO-HPQという測定指標は世界で使われ、日本でも翻訳された。過去4週間のパフォーマンスを測る質問があり、アブセンティーイズム関連項目も含まれる。このほかSPS日本語版、WFunなどがある。これらの質問票で損失労働時間がわかれば、人的資本法と呼ばれる「プレゼンティーイズムによる欠勤相当の日数×平均日給」で金銭的損失が算出できるとした。

終わりに、今後について、「臨床医療では患者の業務遂行能力を妨げない治療内容の検討など、社会医学・心理学分野ではワークエンゲージメントとプレゼンティーイズムとの関連、また、ヘルスリテラシーとプレゼンティーイズムの関連、経営学では健康問題を有する労働者の労働生産性向上対策も重要なテーマになる」とし、これからの研究に強い期待感を表した。

尺度を中心に事前にも多くの質問が寄せられ、当日も質疑応答が行われた。「プレゼンティーイズムはいかに損失を評価するかという意味合いが強いのか、それとも前向きに捉える考え方が今後大きくなるのか」との質問に、武藤氏は「最初から病気を持っている人の生産性は低いという前提があると思う。労働生産性を定義に含めない人の言い分は、病気をもちながら働く人への差別につながるとする向きがあり、生産性低下は使わないという考え」と答えた。「WHO-HPQの質問がわかりにくいとの回答者の感想があり困ったのだが」との問いには、「他の指標を試してみるのも良い。研究者も広く指標を公開していくべき」と応じた。

最後は、福田氏の「プレゼンティーイズムとは何か、それを測る物差しに何をを使うかは、何が知りたいかにより変わってくると感じた」との感想で幕を閉じた。

さんぽ会の詳細は下記サイトをご覧ください。

- ホームページ <http://sanpokai.umin.jp>
- FBページ <http://www.facebook.com/sanpokai>